M：本田先生が言われたことで、ちょっと思ったのですけど、要するに 陰陽の分かれていないという話が出たのですよね、 名古屋の先生が、そう言う事を言われたのですよね、違いました。本田先生、（H：はい）陰陽が分かれていないというのは、病気ではないのですよね。 陰陽が分かれているから病気なのですよ。 だから隂陽が分かれていないものっていうのが世の中にあるのかなと、そういう身体はあるのかなと、本当に健康な人の話ではないのかな、と思って聞いていました。

いよいよ最後の座学を始めます。 皆さん、今年のこの座学の目的と言いますか一番最初に感じてもらうのは季節ですよね。季節、一応4パターンがあったのですけど、春も夏も秋も冬も土用も一応同じパターンなのです。 それを11回に分けてやったということなのですね。 ですから、ボツボツ、春はこのような治療、夏はこのような治療、土用はこのような治療、 秋は、冬はという事が、ある程度皆さんにも読めたのではないかなと思います。このぐらいやっていたら、対外、何回もやっているからしつこいような感じもしますけど、 一応その目的の達成できたのではないかと、そういう感じがしています。それで今日はその最後ですけど、春の治療ですね、 春の診察法と治療法をやっていきたいと思います。本田先生が診察ですね。じゃ、本田先生からよろしくお願いします。

H：それでは春の邪の診察法を、先月もお話ししたのですけど、今日も復習とまとめを兼ねてお話ししていきたいと思います。よろしくお願いします。

春の診察法と言うと、皆さんもご存知だと思いますが、 暦を知って、脈状などを知って、あと病症などを知れば、 春の邪の影響を捉えられると、特徴的なものを知っていくことが必要になります。春は、脈は弦脉、病症は心下満、脇下満痛ですよね、そういう所を診ていく、というのは大丈夫ですよね。では、どういうふうに診ていくのか、という事が大切であって、先月も話に出たと思うのですけど、まず季節の影響というものを診ていくとすれば、全体脈を診ていく、という話がありました、そして、全体脈を見ながら、指はどういうふうに、脈の打っているところに当てるのか、でしたよね、それは三菽を基本にして指を当てていく、皮毛のところから診ていく、というのがありました。なぜ、こういうことをするのかと言うと、邪気というのは体の表面から中の方へ入って行くのが、一応傾向がありますから、まず、浅い三菽というものを大事にして診ていく、という話でした。で、そうしないと、脈の奥の方にも邪気はあるのですが、まず、身体の精気と邪気が戦っている部分を見つける、という事でも、この三菽を基本するべきだと、僕は考えてやっています。

それと、寸口部のあたりの皮膚を診るときの注意点がありましたよね。尺膚を参考にして、尺膚を触るように、脈が弦脈だったら、脈の打っている部分だって「急」、いわゆる突っ張っている手触りがある、というようなものを参考にして診ていくのがありました。尺膚の触り方もですね、いきなり指を皮膚の中にめり込ませるのではなくて、三菽のところ、皮毛のところを診ていく、という事です。言葉では簡単なのですよね、三菽に手を持っていく、というのは、でも、なかなかそれができないと、浅い邪をの影響を診つけることができない事がありますので、その辺りを僕は注意しています。

全体脈、三菽、皮毛、このあたりの話をした後、皆さんの臨床では、どういうふうに変化があったのか、という事をお聴きしたいと思うのですけど、いかがでしょうか。

M：先月の座学の後、自分の治療法が、ちょっと変わったな、余計に悪くなったな、など色々あると思うのですが、どなたか、いらっしゃいますか。じゃあ当てましょうか。片岡先生。困った時の片岡先生。

片岡：お陰さまで劇的に治療効果が上がりました。そう言うことを言ったらいいんですか？

M：それは全然面白くない意見ですからね。

片岡：すみません、質問の意味がよく分からなくて。何か

M：本田先生

H：先月、三菽を大事にしよう、と言う話があったと思うんですよね、全体脈とか。

まあそうされている先生は良いとして、そうされていなかった先生だとか、今回やってみて、自分の診方だとかですね、それを診る為に、どうすれば三菽とか、皮毛の所に、問題なくできるのか、という所を聴かせてもらいたいなと思ったんですね。

片岡：三菽、浅く見るというのが大事というのは僕も思うところで、特に脈もなんですけど、お腹とか尺膚を診るときに、其の所を特に意識してみると、何の邪が影響しているのか、という事がよくわかるんじゃないかなと言う風に思っているっていうことと、先月の講義のお陰でさらに精度が上ったって言うことですね。

M：優等生的なお答、ありがとうございます。劣等性的なお答、誰かないですか？山崎先生

山崎：劣等性の山崎です。三菽は意識しても、こう言う所に来ないと一か月も休むと、三菽が知らない間にかなり重たい三菽になると言うのは、嫌と言うほど経験しているんで、ありがないなと思ってしていました。

それで前回、三菽の意識、実技の時に、ツボに指をあてることも三菽を意識してと、森本先生に教えて頂いて、たしかに、重たくなっていたな、と帰ってから反省して。あ、そっか。これじゃ劣等性の山崎さんじゃなくなっていくけど、ま、ええか。やってみているうちに、

左右差なんが、三菽で触れるとよくわかるのが、人にも言って来たから分かっているはずだったんだけど、今回、この一か月はそう言うことを改めて再認識できて良かったなと。そんなことがありました。

M：はい、どうもありがとうございました。じゃあ、もう一人くらい。飯田先生はどうですか。

飯田：元々三菽はね、気にしてやろうとは思っていたんだけど、以前は三菽から始まって、三菽、六菽、九菽、十二菽と色々診て、胃の気がどの辺に在るのかな、と。九菽を中心に上にあるのか下にあるのか、うんうん考えてやっていたんだけれど、この入門講座に入って、ぱっと三菽を診てからね、これは表面に小さい弦があるなと思ったら、六も九も特に考えずに、さっと肝経の木穴を使ったりして、さっさとやっていくようになったので、治療時間が何分もかかっていたのが、30秒とかそう言う時間に短縮されて、それでも治療効果に差が無いような感じなので、これは臨床がとても楽になったな、と思った次第です。

M：はい、どうもありがとうございました。では、このくらいで良いですか、本田先生。

H：はい、ありがとうございます。僕も多分、皆さんと同じぐらいに診察する時の楽さが出てきましたね。無理に三菽に手を持っていっていたことがあって、全体脈を診ようとすると、全体的に脈を触ろうとするので、単按で診て力が入れていたんだな、と反省点がよく見えたって言うのが僕の反省点で、その辺りは皆さんと同じように、診れるようになったんじゃないかな、と思っています。

じゃあ次に行きます。次は治療穴の話をします。

春というものがわかって、脈状がわかれば、すぐにツボが設定されていると言うお話がありました。

春は井を刺す、と言うことで陰経だったら、井木穴、陽経だったら、兪木穴とか、井金穴を使っていくと言うのは、もう皆さんご存知ですね。で、どう言うツボを触っていくのかと言うところまで、やはり診察法だと思いますので。

まず先月は、外虚内実というツボを触っていって、そのツボ反応を探していきましょう、という話がありましたね。どういうツボを触るのかと言う所まで。じゃあその外虚内実の外虚の部分を触るんですけど、これもこれは触り方の問題で、色々あると思います。

やっぱり邪気がどこにあかで変わってくると思うんですけど、脉状で邪気がどこにあるのかがわかっていても、指をツボに近づけると、ツボをめりこまして診てしまう事があります。

ここでも、三菽の高さに指を持っていき、それから脈診をしていって、邪気がどうなっているのか確認する必要が、僕はあると思っています。

ではその外虚のツボ反応というものは、どういうものを探していけばいいのか？というところだと思うんですけど、基本的に外虚の虚、と書いてありますから、虚のツボの所見というものがありますよね。陥下しているだとか、弛緩しているだとか、冷感があるだとか、あと枯燥ですね。もう一つ、僕、これ、よく分からなんですが、脈わずかに動ずる、というのがありますよね。こう言うのを診ていって、探していると思います。

またここで皆さんにお聞きしたいんですけど、

それを診るときにどういう注意をしているでしょう？

三菽で診ていると言われると、それまでなのですが、今まではどうされていたのかな？という事をお聞きしたいんですね。先月の4時からの実技でも、脉を診てもらって取穴しても、なかなか良い脈にならない状態ってありましたよね。それは何処に問題があるのか、どうすれば改善するのか？と言うのを皆さんと一緒に話し合えたらな、と思っています。お願いします。

M：はい、どうでしょう。要するに技術の問題というのは大きいんですね、この世界は。

技術で古典を、言ってみれば証明していくのが、一つの方法だろうと、僕なんかはそう言う風に思っています。

それで今までやっておられて、いまひとつよくわからなかったとか、例えば、先月のチェックをさせてもらいましたけどね、そういうところで何か変わったのか、 でも家に帰ったら一緒だったのか、 何かそう言うようなボヤキでも聞きたいと思います。誰から行こうかな。西村先生。

西村：外虚内実ですか、もう一回何を答えたらよいのか教えてもらえますか。外虚内実をどう捉えていたかですか。

H：とか、家に帰って治療してみて、それを。

西村：外虚内実を捉えて、陰陽調和のやり方を先月教えて頂いてから、それの方がやりやすいなと思って、やるようになったら、割と脈が前より良くなるようにはなったように思うんですけど。それと私はまだ井穴だと、なかなかツボ反応としての外虚内実が正直わからないです。だけれども、皮膚からちょっと浮かしたところで森本先生に教えて頂いた左回りにちょっと回して、何かあるな、と感じて陰陽調和の手法をやって、脈が良くなると、そこでやっているのですが、それだと前よりやりやすいなと思います。

ただ、それをやってから、子供を結構、するんですけど、子供はやり過ぎちゃうのかな、という気が最近していて、その時はそれで良いような気がするが、あとから聞いて、それが私の治療のせいなのかも。前までは、インフルエンザでも二日しか熱が出なかったのに、 今回5日ぐらい熱が出た、と言われたりとか、ひょっとしてこの子の精気まで取っちゃってるんじゃないだろうかと最近感じて、やりやすくなったと思う反面、子供ときはやり過ぎに注意しないといけないのかなというのを、最近、思っています。そんなんでいいですか。

M：はいはい。じゃあ山崎先生。

山崎：もし答えが辺になったらブレーキかけてね。三菽に手を持っていったら、というものあるけど、僕が個人的にテーマにしてきたのは、ツボを触る時には、必ず井穴なんかの時は特に、ハッキリ言って分からないから、どうするのか、というと、左右を比べるというふうにしているんですよね。

そうすると明らかに左右に違いがある場合は、これは使えるなということで、さあ、どちらを使うのかと言う話になるんですけど。そこから先は脈と相談で左右差があれば、 こっちかなと脈を診て変われば、こっちかなと脈を診て変われば、と現実にはやっているのですけど、三菽に手を持っていくことで、一段とさっきも言いましたけど左右差が見つけやすくなるんじゃないかな、と思っています。思っていながら、さっきも言いましたけど、手が重たくだんだんなってきて、 ダメになっちゃうんですけど、この一か月はそうだそうだと思いながら、そういう意味でも三菽に手を持っていって、なおかつ井穴などは、今、先ほど言われた方みたいに、ツボの反応が分かりにくいので、左右差で何か違いがないのかな、けっこうこの時期、左右差が有るという事は、自分では認識しているつもりです。以上です。

M：はい、どうも。特にストップをかける話でもなかったので、聞きました。他、他、どうでしょう。例えば、今までやっていたのと、自分の認識と森本の教え方はだいぶ違ったな、という気がしている人、それともやっぱり同じだったかと、 自分が治療室やっているのと一緒だな、という印象を持たれた方とか、有ると思うのですけど、全然、相当違うな、と思われたからいらっしゃいますか。ないですか。昼から大丈夫ですね。じゃ、次に行きましょうか。本田先生。

H：僕も質問していいですか。山崎先生のお話に質問させてもらってもいいですか、山崎先生。

左右差を診る、というお話があったのですけど、その左右差は、先ほど僕がお話しした虚の所見があるということで、どちらの方が虚の所見が強いのか、という事を診ているのでしょうか。

山崎：そのつもりですけど、虚というか、おかしなところ、気になる所という言い方の方が現実的でありますけどね。（H：どんなふうに気になるのかな、と思って）先生が言われた陥下とか、冷えとか、それだけでなく熱も、熱が上がってくる場合も逆にありますし、張れている場合も、膨れ上がって来る場合も、全部込みで気になる、虚実両方ともで気になる、そんな感じです。先生は、虚を中心に発表されましたけど、虚も実も両方気になる方みたいで、現実には自分では治療室でやっています。

H：そうしたら、虚の所見でも、実の所見でも、目立った方を取っている、という事でよろしいでしょうか。

山崎：取っておいて、脈の変化を診ていくというやり方、より自分が、この脈、このようになったら良いのにな、と思う方になる方を実際のツボとして使っている、というようなやり方です。

H：はい、もう一つ先生、良いでしょうか。その時の補瀉も、その時のツボによって決める、という事でよろしいですか。

山崎：だから、補瀉の話は前に発表したように、例えば、自経と母穴と子穴は補法でやるし、子穴と畏穴は瀉法でやるし、二年ほど前に発表させてもらったのが、一応、基本パターンです。だけど、これ先月とか、先々月の森本先生のやり方から色々考えていますと、鍼を持っていってじっとしていると、身体の方が瀉法してって、こっちの押手の方へ流れてきたり、補ってって、こっちの方へ流れてくる感じかなと思っているのですけど、それをどこかで森本先生に質問させてもらいたいな、と思っているぐらいなのですけど、タイミングがなかったので、今、質問しても良いのかな。

M：はい、良いですよ。要するに、ツボが山崎先生に教えている、という事ですか。瀉法してくれ、補法してくれ（山崎：ええ）その部分はありますよね、山崎先生がやっておられるのはツボ反応よりも五行論の運用ですね（山崎：そうです）その辺りがね、山崎先生はそのようにやっておられるし、本田先生が言われているのはつぼ反応、外虚内実というような ものがある所を指で探す、という作業ですね。山崎先生のはそれがあってもなかってもいいから 、要するに五行論の運用で行くという考え方ですよね。補瀉法に関しては。（山崎：ええ）だから、ツボが当然、補法してくれ、瀉法してくれって言っています。（山崎：言っていますよね）言っています。だから、それを探せばいいだけです。

山崎：そうですよね、ありがとうございます。聞いてよかった。もう帰っても、まだ速いか。（H：まだ帰らないでください）本田先生の質問に対して、僕答えていますか。

H：わかりました。ツボ反応ではなかった、ということがわかったので、わかりました。

山崎：そうだけれども、探すときはツボの凸凹を探すしかないから、ツボの温度などで探すとかね、産毛を撫でておいて、産毛の、指にこんこん当たる方が気になるとか、そういう意味での反応は探しますけど、虚実に分けて探す、というような考え方はせずに、今、森本先生が言われたみたいに、五行理論で、たぶん、ここだろうな、という所はつっこんでおいて、最後は、ツボの反応が指に当たる、指当たりで探すのですよ。以上です。

H：五行理論であることが、（山崎：それである程度追い込んでおいて）はい、わかりました。ありがとうございます。

M：はい、どうぞ。

傳：ちょっと質問したいのですが、最初は三菽全般で診ると言っていましたけど 、 この三菽を診るときは、寸関尺に当たる指がないので、違うので、ときどき、緩脈が先に当たるので、ときどき、寸脈が先に当たるので、ときどき、尺脈が先に当たるので、この三本指そろって当たっているのではなくて、本田先生はどちらを標準にしているのですか。

H： 基本の菽法を考えたら、 絶対に三菽に指を当てると、右の寸口にしか当たらないのが基本ですよね。（傳：右の寸口）はい。肺は三菽。でも、治療になると患者さんは病態ですから、尺でも浮いている場合があります。関でも浮いている場合があるので、それを見つける為に三菽に指を持っていかないと、一番上の邪気を見つけられないのではないか、という事で、三菽からまず診ていくということをしています。

傳：そうしたら、三菽を先に当たる所は病気ということを考えているのですね。寸関尺の中に。

H：そうです、まず診ていきます。

傳：例えば、左の関脈が先に当たって、左の関脈のところ三菽に邪氣があることを先に考えるのですね。

H：そうです。一番浅い所に当たるものを、まず、診ていこうとしています。

傳：そしてら、右の寸は当たらないから、右の寸も病気じゃないでしょうか。

H：右の寸が当たらないときも考えます。

傳：病気と言ったら、右の寸と左の関の所が病気ですからね。こういうふうに考えたら良いのですか。

H：どちらの病気が治療すれば良いのか、というのは、その時の季節だとか、患者さんの状態で判断しますけど、どちらも頭に入れて診ていきます。

傳：そうしたら、例えば患者さんが来ましたら、左の関脈が左の関が先に当たって、左の尺も先に当たって、二つがあります。そうすると今の状態は、治療に着手するのですが、着手するのは全般的に考えないといけないので、例えば、６９難を的にして、どこに先に、例えば、親子のどっちの虚すれば、母親を補うとかね、そういうことを考えず、邪気があるところに、当たったところに、先、そこに、処理すればいいのですか。

H：僕はそういうふうにしています。

傳：邪気が当たったところで着手して、順番にやっていくという事ですね。

H：順番に考えることもありますし、 そこの一番問題だと思った邪気が処理されたら、あとは精気が回復していって、他の脈状も改善するだろう、と思ってやっています。

傳：わかりました。そしてら、患者さんが来ましたらね、寸関尺、両方とも全部、浮いて上がっている人がいるのですよ、どうすれば良いですか。

H：まず、季節を考えます。

傳：季節を、例えば、今の（H：春ですよね）昨日の患者さんが来ましたらね、寸関尺、両方とも、全部鈎脈になっています。どうすれば良いですか。

H：鈎脈だったら、夏の影響だと思って、心の火穴を触ってみるということをします。

傳：そうしたら、脈状によって左の心から着手するのですね。

H：鈎脈というものが全体脈に現れていたら、はい、そうです。

傳：他の、例えば、左の鈎脈の邪気を考えて、右の鈎脈は無視するのですね。

H：もし、右の鈎脈が左の鈎脈より強いと感じた場合、右の寸口の鈎脈を治療目標にします。

傳：わかりました。ありがとうございました。

M：どこから切って行くかで、色んな言い方をされるのですけど、本田先生が言われているのは、三菽、六菽、九菽、十二菽、十五菽、という、外から中に入って行く考え方ですね。それから傳先生が言われているのは、６９難がベースになっている物の考え方ですよね、何を言っている、相手がどういう質問しているのか、わかって答えてあげる方が親切と言えば親切ですね。自分の意見を主張するよりもね。もっともっと間が埋めれるような気がしますけど。要するに精気論から考えましたら、蔵のバランスという考え方は当然必要なのですけど、邪気の方から考えますと、三菽、六菽、九菽みたいな考え方の方が、とりあえずは実用的と言いますかね、そう言うものであって、どちらが正しくてどちらが間違いというものではないのです。 その辺りはお二人ともわかってもらったらいいと思います。 よろしいでしょうか。（傳：ありがとうございました）次、行きますか。４９難までいきましょうか。

H：次は４９難のまとめ、復習という事でお話ししていきます。４９難は四診法の望、聞、問、切を利用して、五邪を捉えていく、という事で、これもですね、五邪は色々ありますけど、五邪のどれを取っていったらいいのかわからない、という事があって、それをどういうふうに埋めるのか、というと、やっぱり季節と言うものを参考にしていくと、五邪というものも見つけやすい、捉えやすい、という事で使っています。春という事で風邪ですよね。関係があるのは。色臭味声液で言うと、風邪は色に現れるという事で、色を参考にします。脈は弦脉ですね。他の診察法でも風邪の影響を捉えるので、尺膚ですね、皮膚が突っ張っている状況を触って感じ取ることが大切です。あと病症は脇下満痛があります。ここでもですね、他の、脈診、腹診、尺膚診と同じなんですけど、いつも出て来るのですけど、三菽の位置で触っていかないと、尺膚といえども、お腹といえども深い所を診てしまう傾向があります。中のものを診ようとするのも有りだとは思いますが、まずは表面のところで診ていくことが必要な診察だと思って使っています。

今ですね学術部で色々 来期に向かってまとめているのですけど、尺膚のことをまとめていまして、東京夏期研でも 尺膚のことをするのですけど、尺膚って、何で前腕前面で診るのだろう、という単純な問いですよね、 一応、難経とか素問と霊枢のどっちか忘れたのですけど、そこでも書いているのですよね、尺膚という所を見ようと、 そうすると皮膚の硬い脆いだとか、 なめらかだとか渋っているだとか、寒熱だとか、色々診てわかるから、それが全身の皮膚の状態ですよ、だから前腕の前面を見ましょうと、書いているのですけど、どうしてあそこを見るのか、ということですね、 臨床の話とは離れてしまうかもしれませんけど、その辺り、皆さん、 ご存知でしたら教えていただきたいと思います。 一応僕たちが調べた中では、 一難は皆さんご存知ですよね、寸口脈で十二経の状態がわかるということで書いていますよね。 死生吉兆がわかるんだよと。それで、色々、脈どころってあるじゃないですか。脉の診る所。頸動脈だって昔は診られていましたし、太谿や太衝の脈も昔は診られていたのですけど、だんだん診られなくなって、難経では寸口脈が大事にされているのですね。しかも、太淵のところに気が集まり大会する、という書き方がされていますので、もしかしたら、肺経の皮膚の部分を診たら、全身の皮膚の状態も一緒に分かるという事で尺膚の所を見ているのかな、と。そういうことを書いている注釈を見つけたのですけど、それでも何か一応注釈ですから、こじ付けかもしれないな、と思っています。皆さんはいかがお考えでしょうか、よろしくお願いします。

M： どうですか、何か知識をお持ちの方いらっしゃいますか。尺膚診の成り立ちと言いますか、どうして尺膚を診るようになったのか。ないですか。ネットでも頼りましょうか。情報が転がっているかもしれませんし。

傳：尺膚を見るのは、もともと尺膚のところを五蔵、五行をわけてみるのですかね。手首に近いところは心、尺沢のところは腎、肝腎、外側と内側は肝と肺と、真ん中は脾、この尺膚は、まずこれを一つ見ると。もう一つ見るのは、皮膚の下の状態を見ると。 皮膚の下の状態は肌肉の間とか。肌肉の間には、太谿の谿（しく）谷、谿谷（しくこく）というのは、黄帝内経の中にたくさん書いてある、谿谷の中には経気が、經絡の気が集まっていると、そこに診ると。あるいは、そこに、皮膚の下に詰まったら、例えば肉が張れている感じだったら、脾臓の問題とか、手首に近い所に問題があったら、心と肺の問題とか、こういうふうに診方があるので。

M：はい、どうも。ありがとうございます。

山崎：谿谷（しくこく）はどんな漢字。

傳：太谿の谿を書いて谷を書く。合谷の谷の漢字ですね。前は谿。漢字では谿（しく）と読むのですけど、日本語だったら、読み方がわかりませんので、渓谷とか、さんずいへんに、それでも、太谿の谿（H：難しい方の谿）難しい方の。肉と肉の間ですね、大きな場合は「谿」と、小さい場合は「谷」と。（H：書いてもらって良いですか）太谿の谿を書いて、腎経の太谿、（H：皆さん、不確かなので、申し訳ないですね）（山崎：発表された先生に書いてもらったら）

M：暫くお待ちください。いけますか。じゃ、書いてくれますか。

傳：経絡の気が集まる所、（H：谿谷（しつこく）そうそう、大きな肉、小さな肉、肉の間。

M：谿谷（しつこく）

H：谿谷（しつこく）、ありがとうございます。

M：はい、ありがとうございました。という事で、字は良いですか。尺膚診に関して、何か知識をお持ちの方ありますか。 基本的に、僕なんかは難経の13難にちょろっと書かれていて、外邪が入れば反応する、という場所なだけを知っていて、他に何か診方とか、こんな感じのことをやっているだとかありますか。 名古屋の先生。江田先生。

江田：尺膚の診方なのですけど、 尺側の軟らかい所を診るというのと、今、傳先生が仰ったみたいに全体をみる感じと、色々聞くのですが、 ここではどういうふうに診ていったらいいのか、この会ではどういうふうに診ているのか、ちょっと質問したかったのですけど。

M：はい、どうでしょう。

H：ずっと前腕前面と言われてきたのですよね。 僕もそれで見てきたのですけど、僕が調べた、 論尺疾論篇「正→論疾診尺篇（霊枢）」には、難経の注釈でも、脈を診る関上がありますよね、関上から尺沢にかけてを尺という、注釈があったりするので、だから、尺側ではなくて、反対側を診ているのかな、と最近分かったことなのです。それが正しいのか、それも注釈ですから、本当に良いのかわからないのですけど、その辺りを見つけた、というのがあります、最近。フロアの皆さんはどうでしょうか。

M：どうでしょう。他にありますか。名古屋の先生、いらっしゃいますよね、原田先生が尺膚診を一時やっておられたと思うのですが、それに関する情報をお持ちではないでしょうか。 日比先生。何年か前、（日比：はい、発表していました）それから、もうやめました、と言う話も聞いたのですけどね。（日比：いや、辞めてはいないと思うのですが）あまり力を入れていない話もね。あとで聞いたのですけど。

日比：ちょっと最新の情報として、僕は持っていないですね、尺膚について、脈と関連付けて、肺の状態が全身を表わしているので、そこで見ているのかな、ぐらいで思っていました。浅いところと深い所の話は、 脈の深さと関連付けて診て行けばいいのかな、ぐらいで思っているのですけど、すみません。

M：はい、どうも、ありがとうございます。他に尺膚診について情報をお持ちの方、小池先生はどうでしょう。

小池：先ほど森本先生が外邪の影響が現れる所とおっしゃったのですけど、ちょっと概念が違うのかも分からないのですけど、外界の影響を、むしろ受けにくいと聞いたことがあるような覚えがあって、尺膚って普通に、手をだらっとして立ったときに、内側を向いているので、日も当たらないし、風とかも当たりにくいし、むしろ、外界の影響を受けにくいから見るって言うことを聞いたような 気がしていたので、外邪と外界というのは意味合いが違うと思うのですけどね、 そんなのは聞いたことがあります。 それと、脈を見る時にサッと見るので 、診易い所、例えば、お腹が見れない状況の時でも、尺膚で判断できるという便利さもあるのかなと思います、あまり場所は細かく分けて診てはいませんでしたけど、脈を見るのに、手を取っている時に、さっと触り易いところを適当に触っていました。以上です。

M： はい、どうもありがとうございました。色々な見方もあるでしょうし、 考え方もあるんですよね、東洋医学ってそういうものですからね。 脈診なんかでも、それこそ、色んな脈診方法がありますよね、それと同じで、尺膚診でも場所論もあれば、それから実際に触っていく方法とか、そういうものもあるでしょうし、それから、そのもとになる話もありますよね。例えば肺経が通っている、肺って言うのは皮毛ですから、体中の外界と一番接している場所ですよね、だからその場所の集約されたところには、当然、色んな反応が出るという考え方もあるでしょうね、それから、全てに五藏ありですから、肝心脾肺腎にも当然配当できるわけですよね、場所もそうです。それから脈では、五難のように、浅い所から奥の方まで、肺、心、脾、肝、腎ですか、そんな見方もできるでしょうし、それから、質、例えば、脈状に似ていますよね、要するに急のような触り方で合ったら、風邪が入ったのであろうとか、それから、温かったら暑邪が入ったのだろうとか、緩んでいたら飲食労倦の邪が入ったのだろうとか、ザラザラしていたら寒邪が入ったのだろうとか、変にすべすべし過ぎているとかね、そういう状態なら湿邪が入ったのだろうかと、そういうような見方もできるんです。脈診と同じように種類はいくらでもあるし、 考えれば考えられるし、というように解釈されてはどうでしょう。誰が正しいとかではなくて、皆正しいのでしょうね。どうでしょう、こんなんで、本田先生。

H：はい、たくさんご意見いただいて、ありがとうございます。とても、僕たちの中だけでは出てこなかったと思いますので、また、それを参考にしたり、今出た意見を調べ直して、皆さんに提供できるようにしたいと思います。ここまでが、十五難の季節の診察法と四十九難の診察法のまとめでした。

M：ちょっと本田先生に質問してみましょうか。僕が。傳先生の脈の話を、本田先生は邪から診ると話を突っぱねられましたけど、左手関上の脈が触れて、尺の脈が、要するに肝と腎の脈が触れたとき、邪じゃなくて、肝と腎をなんとか治そうと思ったら、次はどういうことを本田先生だったら考えられるのでしょうか。考えられるでしょうか。

H：肝と腎が触れてですね。

M：そういう話だったですよね、傳先生。（傳：はい）

H：これを邪気から考えずにですか。

M：邪気から考えても良いですし、単に本田先生が答えられたのは、全体的な邪気の話をされましたよね、（H：はい）だけど、傳先生にすれば、左手関上と尺中が浮いているのですよ、浮いてたらだめなのに浮いているのですよ、 それを何とかしたいという素朴な質問だったのですよね、 だから、質問と答えが噛み合いにくかったと思うのですよ。

 H：もし、邪気から治療するのだったら、左関上と尺中が浮いているのを目標に治療する、瀉法をする、浮いている、という事で衛分に邪気があると思いますので瀉法するのと、逆にですね、浮いているということは、たぶん、陰の所に気が少ない、営気が少ないので、営気を補う治療をすることも一つ考えます。

M：そうですね、精気論であったら、当然営気を寄せてこないといけませんよね、もっと言えば、衛気、陽気が多すぎて陰気が少ない状態なのですよね、というようなことを、あの時答えられたら、傳先生も、もっとにこにこして聴かれたと思いますけど。（傳：ありがとうございます）よろしいでしょうか。（傳：先生、もう一つ質問いいですか）知りません。どうぞ。

傳：先生は邪気から、外から、三菽から始まるので、精気論からは営気から処理が始まるので、先生の答えは本当に勉強になりまして嬉しいです。ニコニコなりました。もう一つ聞きたいのは、七情からの問題が臨床は実は多いのですよ、感情的な問題で、昨日一人の患者さんが来ました。右の顔が痛くて、口が開けられないので、耳まで、頸まで、肩まで痺れていて、四年なのですけど、脈を診たら、全部右側が一本の線で細い弦脉になっているので、最初は外から診ても治療しても脈の改善がなかったので、精気を補っても脈が変わらなかった、あと、考えると、聞いたのですけど、この細い脈は要するに弦脉みたいなもの、感情的な問題かな、と思って、患者さんに尋ねたのです。そうすると4年前、子供を産んだ時に、旦那さんと離婚したのですよ、産んだ後にこういう病気になって、もう四年になりまして、そうすると色々話をかけてあげて、 それで、あと、肝のところから着手して治療して、脈が全部、ふぁ～と全部変わりまして、口が開けれました。４年の間にはご飯を食べるじたいは、ストレスなんですよ、口が開けれないので、一本指しか入らないので、治療が終わったら三本指が入るので、これも私、初めてだったので、ここの会を通して、色々勉強になりまして、そこで皆さん、先生に聞きたいのは、感情に出てきた脈は、要するに七情の脈診はどうやって臨床で診るのですか。

M：はい、どうでしょう、本田先生。

H：また、邪気から言っているだろ、と言われるかもしれないのですけど、七情が入るという事は、身体の中からの感情、という事なので、七情が発症するには、何かしら、何か影響があるからこそ、七情が出ていると思っているのですね、僕は。七情から出るのではなくて。七情から出るっていうか、七情から診るのは身体の中から出ているものなので、どちらかというと、精気論的な、精気の多少でそうなっているのではないのかな、と考えていたのですけど、邪気の影響、何かしらの影響があって、七情を発症している、ということを僕は診ていますので、だから、何年間か、関上が悪かったのですよね、それは外からの何かの影響、邪気の影響をずっと受けていたのだな、ということを考えます。それで、どんな邪気なのか、という話ですよね。違います。

傳：七情からの邪気を発した場合の邪気の特徴とか、対象方法とか、それを聞きたいのです。教えて欲しいのです。

H：僕は、七情だからとかではなくて、七情を診た時に、脈状で見るのは、ほとんど、いつも診ている、祖脈の部分が出て来ると思っているのですね。脈を診た時、浮沈、遅数、滑濇、虚実、弦緩、それを診るのですけど、七情の脈状を考えるのだけれども、普通の邪気の影響で、その脈状が出ているから、その邪気を取り除けば、七情の状態も改善されるのだろう、と思ってやっています。七情だから、この脈、というのは考えていない、ということです。

傳：要するに外邪、とつながっている、ということですね（H：そうですね）わかりました。

M：外邪と繋がっているのは、当然、繋がっているんですけど、七情からでもいくらでも脉状は変化します。例えばですね、怒りがあれば弦脉を打ちます。それからなんだ、喜び過ぎると言うか、ああいうのは洪脈を打ちますしね。それから思いは緩脉ですよね。それから悲しむようなのは濇脈と言う状態ですね。それから恐れおののくと言うのは滑脉ですか。まあ濡脈もあるかもしれませんね。そういうもんなんでね。必ずそれ、脉状に出ますから、脉状を診られても、診察にはプラスになりますよね。本当にプラスになります。怒っている人の脉状を診たら、すぐ弦脉を打っていますよ。試しに、山崎先生を怒らせたら弦脉が出てきますよ。そういうものなんです。だから人間と言うのは隠せませんからね。ちゃんとそれは出ますから。弦脉をもし見つけたのなら、弦脉をちゃんと処理するような治療をされたら良いだけのことですね。それは例えば、瀉法でやるのだったら風邪を取ればよいし、補法でもし精気を補って何とか弦脉も、と言われるんでしたら、それは肝でしょうね。ほとんど肝です。肝の弦脉を抑えるツボってありますよね。直接、抑える方法もあるでしょうし、けれど山崎先生が使っておられる相剋的なやり方、それから相生的なやり方、そういうものもあって使えます。どちらにしても、弦脉を取れば、弦脉が伸びのある和緩を帯びた柔らかい脉になれば、当然、感情も和緩を帯びてくる。感情と言うのは、心の気持ちですよ。脈診の部じゃないですよ。どうでもええような話でした。そういうものなんですね。そう言う風に考えていかれたら、感情であろうと、要するに七情であろうと、それから外邪であろうと、それから五臓のゆがみであろうと、それから季節の変化であろうと、全部、身体には出ますからね。脈にも当然、出るわけです。さっきから話になっている尺膚にも出る。ただ尺膚をそんなに練習してない、尺膚診をそんなに練習していない人には、捉えきれない部分はあるかもしれませんけれど、ちゃんと出るようになっているのが身体です。と言うように考えられたらどうでしょう。傳先生、宜しいでしょうか。

傳：はい、ありがとうございました。

M：はい、じゃあ中本先生ですか。治療法ですか。（N：六気なんですけど）あ、六気？まだ六気があるの。（N：次は六気なんです）次、六気になるの。んじゃ、中本先生は無し？（N：いや六気の診察）（H：じゃあ、僕？）じゃあ、治療法はどうなっているの？もう、ええか？ほんなら六気に行って。じゃあ、六気に行きましょうか。良いですか、中本先生。

H：はい、続くみたいなんで、三陰三陽ですね。それと六気の診察法。これ三陰三陽のほうから行きましょうか。三陰三陽、七難の診察法に入りたいと思います。中々、三陰三陽の方まで行けなかったので、今日、久しぶりなんですけど。今の時期はですね、少陽の時期になるんですね。三陰三陽の診察法と言ってもですね、15難だとか49難と、まあ15難がほとんど一緒で、季節の暦とですね、脉状を診ていくと言うことが、診察法の基本になります。この季節はですね、たちまち大、たちまち小、たちまち短、たちまち長というような脉状が書かれてるんですね。今までの厥陰だとか、陽明とか太陽とかですね、他の太陰とかの脉状なんかよりかは、ちょっと分かりづらいかなと言うような印象を、僕は最初に見た時に思ったんですけど、どうしてこういう脉状になっているかと言うことを、まず考えたんですね。厥陰と言う季節は、一個前の季節なんですけど、陰が極まった季節なんですね。少陽って言うのは、段々陰が極まって、次に陽が目立ってくる季節の変わり目と言いますか、段々陽が目立ってくる時期の脉状を表すしているんです。脉状によってはですね、陽を表している脉状だとか、陰を表している脉状というのがあったと思います。厥陰だったら、沈短敦というような脉状なんですけど、沈も短もですね、全部、陰を表していて、陰気が結構、極まった脉状だと言うことが分かるんですけど、大とか小とか短とか長というのはですね、どっちも入っているんですね。陽脈とか陰脈と言うのが。だから季節の中で、陰気が目立っている時もあるし、そして段々陽気が目立ってくと言うことも含めてですね、どちらの脉状も難経では想定して作ってくれたんだと思っています。でも人の身体の感受性によってはですね、色々な脉状と言うものを、その時、その身体によっては、邪気として受け入れると言いますか、感受する時は違いますので、大の人もおれば、小の人もおるし、短の人もおれば、長の時もあるので、脈診と言うものをしっかりしていく必要があります。もう一つ、僕が調べた中では、暦の問題と言いますか、これも陽気が影響しやすいのか、陰気が影響しやすいのかと言う所なんですけど、この七難のですね、季節の数え方って言うのはですね、冬至の後の初めての甲子の日から始まるんですね。それを数えていくとですね、60日ごと数えていくとですね、小寒、1月5日なんですけど、そこの初めの方に来たり、大寒の1月20日以降に来たりですね、今年なんかは2月ですよね。2月の初めくらいから始まってきますから、2月の上旬の中まで入ってもまだ、上旬から始まると言うことで、太陽の日照時間から考えると、大分差があるんですね。これも陽気とか陰気とかをですね、影響を受ける差なのかなと思って、この脉状を診ています。その脉状をですね、どう言う風に診察に生かすのかと言うことなんですけど、僕の取穴、選経選穴の基本はですね、少陽と言うことで手の少陽三焦経と足の少陽胆経というものを基本にします。脉状はですね、まず大とか小脉と言うのがあるんですけど、僕は大脈って言うのは浮いている脈ですね。小脉と言うのは沈んでいる脉として診ています。短脉長脉って言うのは、結構、分かりやすくて、浮濇短の短と言うものなので、濇に関係するような脉なのかなと言うことで診ると。長脉も弦牢長の長脉で、弦脉、また牢脈のような脉状なのかなと言うことで診ています。だから治療穴って言うのは、大脈が目立っているとですね、火穴を使うだとか、小脉・沈脉ですね。その時は水穴を触ってみるだとか。短脉は金穴で、長脉は木穴を使うと言うような基本でやっています。皆さんはですね、少陽の時の治療穴と言うものは、色々な考え方があると思うのですけど、どう言う風にされているでしょうか。また、ご意見を聞かせていただけると嬉しいです。よろしくお願いします。

M：ちょっといいですか？浮いているのが大脈で、沈んでいるのが小脉ですか？

H：はい。

M：僕は太いのが大脈でね、細いのが小脉の方がずっとまともかなと思って聞いていたんですけど。どうなんでしょう。

H：それも考えたんですけど、僕が分かりやすいのは浮沈かなと思ったんですけど。そう言う診方があると言うのも良いと思います。

M：浮いていても細い脉もありますよね。

H：はい。

M：だからやっぱり大と言うイメージではないですよね。浮くと言うことは。僕はそのように思ったんですけど。それはそうとして皆さん、使っていらっしゃるでしょうか。この七難の治療法ですね。少陽の季節だから、少陽経を取る。それで脉状に合わせて、今が例えば長脉なら木穴を触るとか、短脉なら金穴を触るとか、それから大脉は何穴でした？

H：火穴。

M：火穴ですね。小脉は水穴ですか。と言うような、本田先生の1つの案なんですけど、他に何か、私はこう言うことをしているとか、言う先生はいらっしゃいますか。季節に強い片岡先生。

片岡：そうですね。七難は使っていません。以前、中本先生がおっしゃっていた、年によって6じゃなくて7になるって言う話、七気になる年があるっていうのを、僕も疑問に思っていて、中々そこら辺が割り切れないと言うか、自分なりに納得ができないと言う所で、前に進まずに使っていないと言うのが現状です。

M：はい、他は。

傳：本田先生に聞きたいんですけど、甲子の日から、初めての甲子は60日、甲子から60日と言うことですか。

H：はい、そうです。

傳：じゃなくて、冬至の日から第一の甲子はどう言う風に計算するんですか。

H：冬至の日の暦があるじゃないですか。そこから十二支十干、十二支じゃないですよね。十干ですよね。60個、甲子だとか壬、何か60個くらいありますよね。

傳：要するに、暦の上に甲と子が現れましたら、それを

H：そこが始め

傳：それが始めと考えるんですか。そうしたら、2013年ですね。2013年の暦を見たらね、この甲子の終わった第3日は、暦の上に甲と子が、その日が現れるんですよ。冬至の後ろの３日間。

H：ずれてると言うことですよね。

傳：その計算のやり方が違うと、全然違うので。例えば甲子の日の後ろから60日から、計算がこれが１つの甲子の日か、或は暦の上に甲と子が現れる日から計算するか。両法の計算方が全然違うんですよ。

H：僕が計算したのはですね、冬至の後の初めての甲子の日から計算しています。

傳：暦の上の計算ですね。

H：そうです。

傳：それをさっき言ったように、2013年の冬至の後に第１個の甲子の日の現れるのが、実は冬至の後３日なんですよ。

H：冬至の後の３日後に始まるということですか？

傳：そうなんです。

H：それは冬至の後の甲子

傳：3日で、12月24日に甲と子が現れるんですよ。

H：そこから計算するんじゃないでしょうか、普通は。

傳：それはね、1ヵ月経ってから始まるのと、3日から始まるのと、1ヵ月の差があるんですよ。

H：僕はその最初の、3日後に始まる甲子の日が、多分計算しているんだと思います。

傳：そうしたら3日しかないのは？

H：3日しかないと言うのは？その前の厥陰の日と言うのもあるんじゃないですか。

傳：冬至の後に甲子と言うことは、60日の計算だと思いますけど。実際の60日。

H：その辺りはどうなんでしょうか。

傳：暦の上に甲子と関係なしで。60日で、60日が甲子なんですよ。

H：要するに、3日後の甲子は数えないと言うことですか？

傳：そうですね。その要するに難経の上の本当の意味は、僕の理解ですね。正しいのかは分かりませんけど、僕の理解は、冬至の後に60日と言うことを指しているんです。暦の上の甲子とは違うと思います。

H：初めての甲子ではないんですか。

傳：そうそう。60日で甲子と言うことです。人間の還暦が60歳と同じ。

H：と言う考えでやられている？

傳：そうそう。その方が実際に脉に近いかなと思います。

H：この辺りはどうなんでしょう。

山崎：僕は今の傳先生の意見に賛成です。隠れファンとして賛成しています。そうせんと、甲子って言う甲子の日って言うのは、60日を1つの単位で計算します、の代名詞やという理解です。だから12月の例えば、20日が冬至やとしたら、それから甲子の日が立って言うのは、60日が立ってと言うことの、別の言い方をしているだけやと言う意味であって、カレンダーに出てくる甲子の日、という意味ではないと思っていると言うことで、傳先生と同じ考え方。そうせんと、本田先生が今言われたみたいに、12月23日から少陽が始まる年もあるし、2月のいつと言った？の日から少陽が始まる日もあり、ごっつう差ですよね。そんな差があったら大変やな、と僕は個人には思って、きっとこれは60日って言う言い方を、中国の独特の詩の表現か何かで、甲子って言う表現を使った方がスマートな文章になるから、60日って言うたら不細工になるから、だから甲子って言う表現を使ったんじゃないかなと言う理解をしています。だから傳先生の意見に１票入れます。

M：色々な意見があって良いと思います。実用的な考え方がベースになっててやる考え方。ただどんなもんでしょうね。例えば冬至のあくる日からが、甲子と言いますかね、甲子ですよね。それからやっても合う年もあるんじゃないですか。だから僕は、年って言うのは色々あるんだと思うんですよね。だから今年みたいに、やたらに寒い年もあれば、正月から温い年もありますよね。だからそう言う時に、どういうようなことを皆さん、考えられるかと言うことなんですよ。だから一般的に、冬は寒いもの、夏は暑いもの、秋は涼しいもの、春は温くなるものと、言うような頭であればそれに合わせたい考えは、別におかしくはないんです。実用的だと思うんですね。でも、そうならない年もいくらでもあるわけですよね。寒い夏もありますよね。場所によっても違いますよね。ただ、僕たちは大阪、この近辺に住んでいますから、何か傳先生や山崎先生の考え方が、何かよく分かるような気はしますけどね。ただ、本当に北海道の人と沖縄の人が、同じ感覚でその七難を考えられるでしょうか。と言うような考え方もできるんじゃないでしょうか。僕はそのように、大きくものを考えてあげた方が、七難は使えるんじゃないかと言うようには思います。これは僕の考え方ですね。だから実用的な考え方、ましてやここで治療をしているんですから、それに合うような考え方であれば、60日の後、冬至の60日後からものを考えていくっていうのも実用的なんでしょうね。この辺りは。と言うような所でしょうか。これは僕の意見ですけどね。世界を大きく見るっていうのも、僕たちのしないといけないことかな、と思います。はい、それであと時間はなんぼほどあるの？じゃあまだ35分あるの？次は治療？治療の話は途中で止まっているのかな。

H：止まっていないです。

M：あれで良かった？はい。じゃあ、次、中本先生ですか。治療ですか。じゃあ中本先生、お願いします。

N：はい、六気の治療、難経の三陰三陽の治療に入ります。まあ最近はですね、ここ１～２週間ですか、本当に気象がころころ変わってですね、めちゃくちゃ寒い日もあれば、今日でも朝はちょっとひんやりしていたけど、今は大分暑いし、こう言う風にどんどん変わっていっていますよね。何日か前は雨が、岩国の方ではザーザー降ったりとかしていました。こう言う風に少陽の時期と言うのは、ころころ変わるような先ほど脈の話がありましたけど、たちまち大、たちまち小、たちまち短、たちまち長ですか。そのような脉って言うのが、どんどん出ていくわけですね。ここ一年、今日で講義が最後になってしまうんですけど、ずっと一年間、邪の治療、テーマを邪の研究、邪論の研究で、邪正抗争と言うことをずっとやってきたのですが、皆さん、今までこの講義が一年前に始まるまではですね、邪に対して臨床でどのように使っていたのか。使っていない方もおられたと思いますが、ここ一年、邪をやってきて、季節の治療をずっとやってきて、どう言う風に臨床に取り入れられてきているのか。取り入れられていない方もおられるかもしれないですけど、理由と言いますか、どう言う所が使いにくいだとか、そう言うのをちょっときかせていただけたらと思うのですが、よろしくお願いいたします。

M：はい、どうでしょう。中本先生と本田先生に一年間、こう言う季節に関するお話、それから49難、それから六気などなどのお話をしていただきましたけれど、どうでしょう。感想ですか？感想を聞いたらいいのですか？

N：そうですね。まずやっていなかった人がやりだして感じた事っていうのが

M：それまで、去年までやっていなかったけど、ごめんなさい。去年ちゃうわ、

N：一年前まではあまりやっていなかったのに、ここ一年で勉強しだして、

M：ちょっと面白いなと思いだした、と言う人はいらっしゃいますか？それまでは全然、季節なんか興味がなかったけど、やってみたら、結構いけるじゃないかと思った人はいませんか？いたら手を挙げてください。河村先生なんかはどうですか。

河村：はい、あの、この一年を通して治療するにあたって、季節を凄い重要視するようになってきました。

M：それまで季節のことを考えてなかったんやな。

河村：全く考えていなかったです。

M：正直で宜しい。意識するだけでもやっぱり、どういうんですか、良いことなんですよ。それから患者なんて、今まで痛くなかったのが、痛い痛い言って来たとしましょう、同じ患者がね。その時にね、やっぱり「あ、低気圧もったな」とかね「寒くなったからね」とかね「春はこんなもんやね」とかね適当にごまかせるんですよね。知っているだけで。だから便利ツールでもある、と言うようなことはあると思います。他にどなたか、去年まではやっていなかったけど、今年から、今年度からやろうと、やって面白かったとか。

N：河村先生、さっきの、すんなり取り入れられたような感じですか？

河村：治療するにあたっての引き出しと言いますか、考え方が増えたって言うのは、自分には大きいかなと思って、はい。

N：はい、ありがとうございます。

M：要するに前向きですね。はい、竹下先生どうでしょう。

竹下：僕は最初は、邪気を捉えると言う意味で、弦だったりとか、洪だったりとか、濇だったり緩だったりとか、そういうところをやっぱり五邪って言う形で探すことが、最初は多かったんですけど、季節の方を意識し始めてからは、５つ分からなかったら季節にいようみたいな、最初はそう言う所があって、でも今は季節が春なんで、季節の方が優先順位として先に取ると言うか、捉えていくと言うことは変わったかなって言うのはあります。

M：中垣先生

中垣：私の場合はもう、始めから信じてずっとやってきたので、疑いを持たずに素直にやってきた結果、やっぱり結果が出てるので、季節、自然の法則の季節の方からと、あと脈の統合性と言いますか、それを併せてやっております。

M：はい、ありがとうございます。こんな季節なんかろくなもんじゃない、と思っている人はいませんか。こんな季節を一年間聞かせやがって、このー、と思っている人はいませんか。小池先生。小池先生が思ってたりして。

小池：思っていません。

M：面白くないな。思ってますよって言って欲しいな。

小池：ただ、どっちかと言えば49難がまず、私は来るかな、と言う感じで、その中であとは迷った時と言うか、このツボを触っても、こっちのツボを触っても、どっちもいけそうだけど、よりどっちが良いかなと言うた時に、季節によって選ぶ傾向はあります。それと慢性固疾の人なんかで、年中、腎を触った方が良い人もいてはるんですよね。大体、全く毎回毎回、腎と言うわけではないですけど、そう言う時にやっぱり季節によって選穴は変わっていくな、って。それは自然と、自然とと言うか、別に春だから井穴を触ろうと思わんでも、一番良いのを選んだら、たまたまそうなるというか、土用だったら土穴が一番良いなとかね。そう言う感じでは、やっぱり季節ってあるんやなって言うのは思っています。

M：実感してこられているわけですね。実感がどんどん膨らんで来ているわけですよね。他、つまづいているとか、何か導入しにくいとか、そんな事を思っておられる方はいらっしゃいますか。尾垣先生なんかはどうでしょう。

尾垣：でもちょっと、あまり意見を言うことは出来ないかなと思います。私の経験では。はい、ありがとうございます。

M：季節の感じはどうですか。季節はあると思われますか？

尾垣：そうですね。やっぱり春なんかは、そう言う患者さんの症状が、より明確にというか、他の季節よりも感じやすいなって言う感じはします。

M：そこからなんですよ。僕もそこから入ったんですから。まず春を覚えたらね、夏に行こうかなと思いますよ。夏に行ったらね土用があるな、と。そうしたらね、秋が来たらまた違うなと。冬が来たら、あーと言う感じですね。だからやっぱり、まずは春を覚えると言うのは、僕は一つのきっかけとしては悪くないんじゃないですかね。今年の春、おかしいと思って、一年経ってその患者さんがまた続いているとしたら、また来年の春にもね、同じ症状で来るかもしれません。その辺も1つのね、確認のツールと思って、チャンスだと思ってやっていかれたらどうでしょうね。

尾垣：ありがとうございます。

M：いいですか。まだ、他、聞いた方がいい？

N：使いにくいという意見があれば、聞きたいなとは思っているのですが。

M：使いにくいとは言いにくいもんね。（N：言いにくいですか）んー。何かあとで恨まれそうな感じがする。

N：はい、ありがとうございます。まあ僕も一年前までは、だいたい49難っていうのを主にやってて、今も結構、根幹ではあるんですが、49難をやってきてですね、邪の診察・治療って言うのはずっとやってきてましたから、その辺はいいんですが、この一年間、季節をやってきてですね、やっぱり季節って言うのは影響と言うのはおこがましいと言う話が、先月か先先月くらいにありましたけど、やっぱり大きいとは思っているんですね。この大阪では毎月、四時によってですね全部、講義を変えていっているので、これで一年間やって、一年間のそれぞれの季節による治療と診察法というのが勉強できて、とても良かったんじゃないかなと思っています。それで皆さんの臨床にですね、取り入れられたらまた嬉しいかなと、取り入れられなくても知識にはなったかなと思っているので、やった意味はかなりあるんじゃないかな、と勝手に思っております。そして先月もこの話が出たんですが、その患者さんを目の前にして、季節で考えるのか、脉状で考えるのか、49難的な診察で考えるのか、っていうのはやっぱり、何を主にして診察をしたいのかと言う話がありましたよね。そう言うことを大事にすることもありますし、一番気になる所って言うのを考えていくっていうことも、勿論、あるかなと思います。それはその時によって変わっていくと思います。なかり難病と言うかね、ずっと変わらない症状って言う方もおられますし、その方は僕も触る経は変わらずに、その季節によって変えたりとかもしますし、季節をメインにしてやることもあります。その辺は臨機応変にやっていることろです。例えば、今の時期であれば季肋部、肋骨の辺が突っ張っていると言う風になればですね、やっぱり木穴って言うのを触っていくと思いますし、今の時期でも臭いが気になれば、これは暑邪が入ったと言う風に考えて触っていきます。火穴を大体触ることもあります。これもですね、一年前までは49難でやっていたって言う風な感じですけど、今でしたら春って言うことも勿論、考えますし、今からやる六気ですね。難経と素問の六気っていうので、素問の方の六気で言えば、今回は少陰君火って言うのが入ってきますよね。そうなると火穴も触るっていうのが、49難だけの意味ではなくなってですね、季節に関係するツボと言うことも言えると言うことになってくると思います。そうするとその触る意味がまた、季節的にも出てくるかと思いますので、面白いかなと思っております。人間って言うのは宇宙の一部ですから、人間が宇宙を作ったわけではないと言う話が、何回も出てきていますよね。ですからそういう影響、宇宙の一部としての変化って言うのは必ず、身体に起こっていると言う風に考えていってですね、患者さんに対応していくようにはしています。この辺で本題に入っていきます。

今日はですね、先ほどの話があった少陽。僕もこれ、本田先生が話されたようにですね、冬至のあとの甲子の日から、って言う風にずっと考えていましたので、そう言うこともあるのか、と今、新しい知識が入ってきたなと、ちょっとこの辺も考えていこうとは思っています。この少陽の時期の脉って言うのは、大小短長ですね。大きくなったり小さくなったり、短くなったり長くなったり、と言う風なことがかなりあると。これが僕はその時の天候によって、今はとにかく季節が変わり易いのでですね、その時の状態、気候によってコロコロ身体の方は変わっていくんだろうと思っています。そしてその時の脉状を診てですね、大きければこれは暑邪が入ったのかな、と言うことで火穴だったり、小さかったら冷えたと言うことで金穴、金穴じゃない。水穴か。寒邪で水穴。短いって言うのは、乾燥と考えてですね金穴。長いのは、指に当たる範囲が長いって言うのは、風邪が入ったと言うことで木穴と言う風に考えてやっております。少陽なので、少陽心包経と三焦経か。そう言う経が主になるのかな、と思ってますが、その他の経でも、一応この大小短長というところで選穴をですね、金穴、木穴とかそう言う風に考えてやっています。今、うちに来られている患者さんの話をちょっとしますと、この方は37歳女性の方が来られているんですが、症状がある時に来ていると言う状態の方です。2月の初め、6日に来られた時には、お風呂に入ると胸に発疹が出るって言われるんですね。あとは手は死の冷えと言うこと。これだけ聞くと、以前なら虚熱が上がっているんだろうな、冷えのぼせなんだな、と言う風に考えていました。色を診るとですね、青白い色をされているんですね。脈を診るとやっぱり長い、長脉をしていると。そうすると出てくるツボは木穴。49難も春も考えていくと、肝の木穴って言うのが良いかな、と思いまして、それから肝の木穴を触ると、長い脉がちょっと短くなったかな、胃の気が出て良い感じかな、と言う結果でした。それが10日後に来られた時には、今度は鼻水が出てきたって言う、最近鼻水が出るんですって。で膻中の発疹と手足の冷えも、またちょっと出て来たって言うことで、やはり色は青いんですね。青白い色をされている。脈を診るとね、小さい脈をしているんですね。小さいと言うことで水穴を選択すると言う考えがありますので、あ、これは水穴かと。一番その脉の中で気になったのが、右寸口の肺のところが、そう言う風な小ささって言うのを感じましたので、これは右の肺に寒邪が入ったんだろう、素問的な寒邪ですね。入ったのだろう、と言う風に考えてですね、そこを取穴しました。こうやって一人の患者さんにも、コロコロ季節によって状態が変わるんだな、と言うのが分かりました。このことを考えながらやっていくと、今は結構、色々な脉が出てくるんだと思うんですね。木穴を触ることもあるし、一人の患者さんでもですね。水穴を触ることも、金穴、火穴っていうのも結構、あると思うんです。そう言う風に考えていくと、バラバラな季節かもしれないです。因みにこの方はですね、ツボ反応って言うのがもう本当に分かりやすい、いつもペコっとへっ込んでて、ちょっとしっとりしている感じですね。一応、虚の所見と言うことで診ているんですが、今、実技でもですね、この虚の所見、ツボ反応と言うのを捉えて取穴をやられていますよね。皆さんはちゃんとこの虚の所見って言うのが分かるようになってきましたかね。中々ツボが分からない、どう言う所を捉えて良いのか分からないって言う方がおられるのかな、と思ってちょっとお聞きするんですが、虚って言うのは分かるでしょうか。触ってみて。どうでしょう。お願いできますか。

M：どうでしょう。ツボは分かりますよね。ただ、先月の診方を見ていますと、やっぱりどうしてもなんか、押さえに行く傾向がまだまだ、まだまだまだかな。まだまだではないですね。まだありますね。どういうんかな。ツボ反応を確かめたいんでしょうけど、ツボの反応って結構、三菽辺りで探れますから、そういうものを探すように。押さえればキリなく泥沼になっていくのがツボですからね。だからまずは三菽。全て三菽とは言いませんけど、まずは三菽と言う所を診れたら、本当に良いツボ、生きて働いているツボ、役に立つツボ、効くツボ。そういうものがちゃんと取れますからね。だから三菽を忘れないと言うことは、大事だと思いますけれど、今日もまた4時からやりますので、また考えておって欲しいと思うんですけど。どうでしょう。何かもうちょっと自分が分からないとか、中本先生に聞いておきたいことがあるとかあったら、誰か手を挙げてください。

小池：質問なんですけど、今の脈象のところで、乍かに大、乍かに小、乍かに短、乍かに長というのを、今の中本先生の説明だと、患者さんが来られるたびに変わってる、と言う風に言われたように思うんですが、私が思っていたのは、脈を診ている間に大きくなったり小さくなったり、長くなったり短くなったり、とその診ている時に色々と変わると言う風に、私は思っていたんですね。この六気の治療と言うのはあまり得意じゃなくて、あまりこの季節として診ていないんですが、ただそう言う風な、大きくなったり小さくなったりの脈の人の場合に、これは少陽経を触った方が良いのかな、って言う風には思ったりしていたんですが、その辺はどうなんでしょうか。

M：はい、中本先生。

N：はい。その短時間にコロコロ変わるっていうのが、今まで診た事がないので、そういう意味ではなくて、僕は例えば毎日、来た患者さんがおられたとしてですね、今日は大きいな、今日は小さいな、とその日によって違うかなと言う。それは気温とかですね、気象に関係する事かな、と思って今考えています。そう言う方はおられますか？診ていて大きくなったり小さくなったりっていう。

小池：はい。濇脈と解釈することもできますけど、凄い変化すると言う方はおられると思うのですが。

M：両方ありです。はい、それでおしまい。

N：はい、ありがとうございます。

M：両方ありますよ。はい。小池先生、それで宜しいでしょうか。

小池：はい、わかりました。

N：はい、ありがとうございます。他に在りますでしょうか。今の点でも良いですし、虚のツボ反応

M：ツボ反応が捉えにくいと。中本先生やったらちゃんと教えてくれるんちゃうかなと。

H：中本先生、ありがとうございます。ツボ反応の所で、よくしっとりしていると言う言葉を使われるんですけど、しっとりって言うのはどう言う手触りなんでしょう。濡れているんでしょうか。

N：はい。この患者さんの場合は、濡れているくらいのしっとり。汗とかではなくてですね、何かクリームを塗っているようなしっとり感と言う感じがしました。

H：それは何でしっとりしているのかな、って言う所までは

N：僕が考えているのは、やっぱりそこの表面って言うのは虚している、漏れているんかなと思っています。

H：腠理が開いて（N：はい）水が出てしまっていると（N：そうですね）はい、分かりました。ありがとうございます。

M：何が漏れているんですか。

N：まあ津液なんでしょうが、陽気も多分、漏れている、一緒に。

M：要するに精気が漏れているんですか。

N：漏れていると考えています。

M：はいはい。

H：もう一つ良いですか？しっとりしているのは、尺膚全体としてのしっとりなのか、それともそこのツボだけが凄くしっとりしているのか、っていうのはどうなんでしょうか。

N：この方は、全体的に乾燥されています、皮毛が。それでそのツボはしっとりしているという感じです。

M：乾燥されていますか。中々面白い。

H：はい、ありがとうございました。

M：いいですか。他に、乾燥されていない人、いませんか。あんまり言うたらパワハラになるか。他にないですか。もうツボ、大丈夫ですか。江田先生、どうぞ。

江田：今日の六気の診察法なんですけど、これはいわゆる、弦が診えなかったからそっちに行った感じですか。

N：二回目の話ですか。

江田：そうですね。小とか言う話だったじゃないですか。それはまず、弦を探して、無かったからそっちに行った、それともそうじゃなくても、小って言うのが気になったから、弦は気にせずにいきなりそう言う診断をされたのかを聞きたくて質問しました。

N：季節的にはですね、やはり五季、四時って言うのが、僕の中でちょっと大きいんですよね。まずはこの時期では、まだ春になっていない時期なので、2月ですから、なっていないので弦て言うことは考えてはないところもあるんですが、そろそろ出てくるかな。この方は年中通して、一応、突っ張っている事が多い方なんですよね。ですから一応、弦を探しに行くっていうのはあります。あるんですが、この時はそういうものがなかったと言うことです。

M：はい、こういうものはね、ベタに言うとマイブームなんですよね。自分が七難で治療していると思うと、次に七難でモノを診るようになるんですよ。49難でやりたい時は、49難がどうしても基本になります。それから素問の六気でやりたい時は、素問の六気が基本になると。だから一瞬でマイブームを作っている傾向は、治療家はあると思います。だから別にマイブームも良いし、何個も重ねるのも良いです。要するに、良い治療ができたら良いくらいに思われたら良いと思います。以上です。

江田：ありがとうございます。

N：小池先生（M：小池先生、どうぞ）

小池：春の季節区分ですが、区分って言うか、中本先生の方は春は2/4～5/4って書かれてて、本田先生の方は春は2/4～4/16、次の日が土用って書かれてるんですが、どっちでしょう。私は土用は土用と診ているんですが。中本先生は、土用は、春の土用やから、中本先生の書き方やったら、あくまでも春がまずあって、と言うことになるんですかね。

N：はい。まず春だったら春って言うのを考えます。

小池：春の土用の季節も、井木穴とかを中心に

N：土用に、春の土用になると、春もあるし、そこに土用の邪って言うのが入って来ると考えますので、土穴か、土穴を考えることはあります。

小池：こともある、と言う感じ。

N：はい。それは脉状を診て決めていきます。

小池：分かりました。

M：まあ、あれですよ。春から急に夏に変わるということもないでしょうから、どっかでね、混ざった状態があるんでしょう。それが土用と、春の土用となるんでしょうしね。春の土用、秋の土用、冬の土用、それから夏の土用はまあ土用になっているんでしょうね。だからどう言うんですかね、必ず急に弦脉から洪脉に変わると言うことはないんですよ。だからそのためには、18日間くらいの、18日か19日間かは知りませんけど、そのくらいの要するにモラトリアムか。何かそういうものが必要である、と言うようなことを、素問を書いた人は思ったんでしょうね。難経を書いた人も、そう思ってかもしれませんけどね。両方の要素はあると思いますし、何日から何日までって言うように観察するのも良いんですけど、そうはならんこともあると思いますよ。弦が結構、5月の頭くらいまでしっかり打っているような患者さんもありますしね。それは季節だけじゃなくて、先ほどの七情の話が出ましたけど、本当は土用に入っていても、腹が立っている人は弦脉を打つでしょうしね。だからそう言う風な色々なものが、要するにスパイラルと言うか、要するに絡み合っているのが東洋医学であったり、身体であったりするもんなんですからね。複雑系ですよね。そう言う風に思われたらどうなんでしょう。1つの考え方だけで、あまりマイブームを作り過ぎないことは大事かもしれませんね。はい、どうぞ。

N：僕は季節はですね、1月位ちょっとダブる所はあるんじゃないかな、と言うくらいで考えてます。ですから、かなり幅があるかなと思っています。それとですね、ツボの話なんですが、ツボって言うのはかなり、先ほど三菽で触るっていう話がありましたよね。今、学術部でも、どう言う風に触ったら良いのか、って言うような、どう言う風に伝えたらいいのか、って言うような事が話し合われているんですが、例えばティッシュを一枚敷いてですね、その上に手を置いて、ティッシュが破れずに抜けるような重さであるとかですね、そう言う風な表現がいいかな、とか。とにかく、軽くて、だからと言って空中に浮くんじゃなくて、本当、ソフトに触っていると言うような感じの触り方。ツボを診る時も、人差し指でそれを出来るようにする、と言うような感じで。午後からも研修していきますけど、そう言う風に診ていかれたら良いかなと思います。それと、先月の、森本先生が話された前田先生の腰の話がありましたよね。かなり腰の張っている人って言う方は多いと思うんですね、臨床でも。そこにも虚はある、と言う風な話がありましたよね。昔は陰陽論で、そういう硬い所がある、腰なんかパンパンに張っている方がおられる。それを陰陽論で考えると、これは表面が硬いんだから、この奥にかなり硬い筋肉の奥に虚があるのかな、と言うことを考えたりはしていたんですよね。だからと言って、その虚を探すって、硬い筋肉をぶ厚いのがありますので、その下の虚ってどうやって探すんだろうと思っていました。で、前田先生の腰の話ですね。表面に虚がある、と言うような話があったと思います。だから薄い所ですね、本当に１ｍｍないかも知れないですけど、表面の虚を探して触れるようにする、と言うことって言うのは、かなりこれからの実技は重要なことになってくるんじゃないかな、と思っています。午後からもこれはやっていけたらと思うので、皆さん、よろしくお願いいたします。キリが良いのでここで終わろうと思うのですが。

M：はい、と言うことでですね、11回にわたって、季節を中心に座学を本田先生と中本先生にやっていただきました。皆さん、ご清聴、ご協力、ありがとうございました。終わります。さようなら。

修了